

偶像破壊と固定観念

Greatchain

2020/07/08

我々の皮膚の壁は、否定できない絶対的なものであるかのように、「アイツラに対する我々と」いう愚かな固定観念は、あたかも大切な病気であるかのように、我々は考えている。

長いこと、日韓の確執の問題を、日本人側の代表のように扱われて、かなりの時間をかけて論じ合ったことのある私は、そのような結論に至った。これはどう考えても、どちらが悪いという問題ではない。どちらも悪い。そこで感じたことは、何かが突き抜けて、共に目覚めるというような体験が起こらない限り、この確執は永遠に解決しない、ということだった。

今、アメリカ全土を通じて抗議運動として起こり、歴史的には、欧米と欧米に苦しめられてきた者たちの、根深い恨みとして起こっている世界的な闘争でも、同じようなことが起こっている。それは、皮膚の色の違いというものによって、韓日とはまた別の、タチの悪いものとして起こっている。これは本当に解決できない問題なのか、それとも何かヒントがあるのだろうか？

我々の憎しみは、ひとたび生ずれば、絶対的な、テコでも動かぬものになるのだろうか？ 加害者・被害者という対立は、絶対のもの、聖なるもので、永遠に固定すべきものなのだろうか？ ひょっとして我々は、畏にかけられたように、錯覚に陥ってはいないだろうか？

Antifa とか Black Lives Matter (BLM、黒人人権運動) などと呼ばれて、世界的に荒れている運動は、このところ偶像破壊という形をとることが多い。これは黒人たちが白人に向けて、恨みを晴らし快哉を叫ぶための手段で、ある段階までは納得できるものだ。しかし、銅像や石像などにそもそも、どれだけの意味があるだろうか。馬に跨った英雄や武将の像に、どれだけの「重さ」があるか、非常に疑問である。それは、政治的動機によって作られることが多い。「ラッシュモア山」に彫刻された 4 人のアメリカ大統領の場合でも同じである。これらは、犯すべからざるアメリカ合衆国の聖像であるか?? 誰もそうは思わないだろう。アメリカが本当に聖なる国家になるためには、道徳的革命によって一流国にならなければならない。それが今、要求され、目指されねばならない。しかし現在そこには、その片鱗もないどころか、かろうじて暴徒を抑えるだけの権威しかない。

クリストファー・コロンブスの像を倒して、黒人のものに取り換えよと叫んだり（実行したり）、「我々は白人を一掃することができる。彼らは遺伝的な出来損ないだ」などと叫んだりすることには、それなりの意味はある。しかし、それきりの意味しかない。その運動は何を目指すのか、そのビジョンが全くない。

このことについてアンドレ・ヴルチェク (Andre Vltchek) の貴重な記事がある：—「**なぜこの現行のアメリカ“革命”は、失敗する運命にあるのか？**」(Information Clearing House, June 29, 2020)

「怒りには十分な理由があり、その恨みは、混乱した、社会的に不安定な民衆を通じて、都市でも過疎地でも、深い根を張っている。少数者は抑圧を感じ、現に抑圧されている。実際彼らは、この国の誕生以来、2世紀間にわたって、屈辱的に抑え込まれてきた。

いくつか正しい言葉が発せられ、書かれてきた。多くの適切な感情が表現されてきた。

にもかかわらず、にもかかわらず… 確かにそれは革命に見え、革命のような感触があるが、それは革命ではない、断じてそうではない！ なぜか？

(他者を引用して)「アメリカ、すなわち Marlboro Man の国の抗議者たちは、何も得るところなく終わるだろう。なぜなら、そこには何の連帯もなく、何のビジョンも、何の指導理念もなく、“1パーセント”に対する共通の戦いによって、人々を団結させるべきものが、何もないからである。」

ヴルチェクが使う「革命」という言葉は、明らかに普通考えられる左翼革命のようなものではない。それはもっと深い、「1パーセント」すなわち、闇の陰謀団との戦いとしての革命である。その本質は目に見えるものではなく、霊的な戦いである。いかに「霊的」という言葉を毛嫌いする人々があろうと、それは正しく捉えなければならない。我々はこの時代、「悪そのもの」と対決しようとしている。

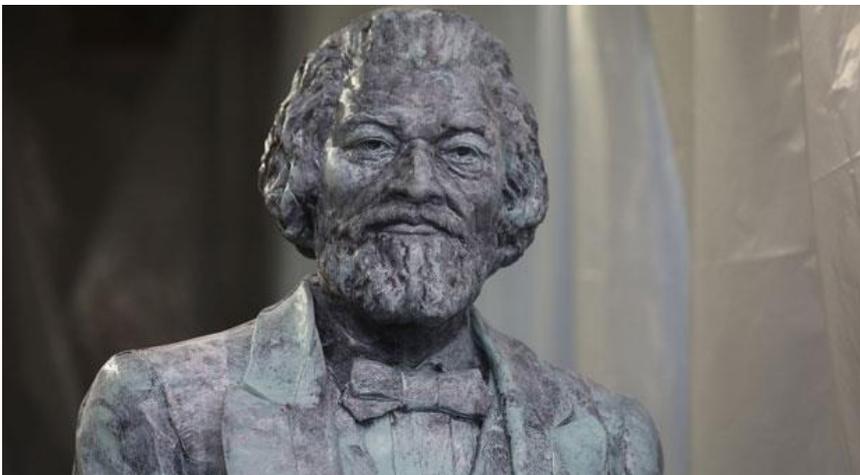
そうした自覚のないところで、すなわち途方もなく大きな悪の構造の見えないところで、ただ憎しみや恨みをおちまけるのは、間違っている。そして運動としては敗北するだけだ。ヴルチェクはそう言っていると思うと。これは、韓日のせせこましい憎み合いに似ている。

そう考えた上で、この偶像破壊運動の中でも特別の位置を占める、「フレデリック・ダグラス像の破壊」に関する記事を考えてみるべきである。普通の BLM の偶像破壊は、黒人が

白人に対する怒りをぶちまけたものである。しかしこの事件は、おそらく白人が、黒人奴隷に対する怒り——冷笑ともとれる——を見せつけたものである。Frederick Douglas は、奴隷出身の、情熱的な解放運動で有名になった知識人である。その彼の銅像が、168 年前に、彼が有名な演説を行った記念日の、7 月 4 日（独立記念日）に、何者かによって無残に引き倒された。犯人はわからないと言われている。

これはただの事件ではない。黒人奴隷に対する悪意が誇示された、悪質な事件である。これは単独でやった行為とは考えられず、複数の者がカネをもらってやったものであろう。ただ、これが BLM 暴力に交じって、並行して起こっていることに意味がある。これは、この運動を行う者が、アイツラと我々、加害者・被害者というような、狭い世界に閉じこもっていては、何も解決しないことを明らかにしている。

今、途方もなく大きな悪が、必死になって世界を動かそうとしている。それは明らかに、人間的な憎しみの次元でなく、神と悪魔の対決として起こっている。



破壊されたフレデリック・ダグラス像（1818-1895）